

S. Mookerjee and H. Nagasaki :

The Pramānavārttikam of Dharmakīrti.

An English Translation of the First Chapter
with the Auto-commentary and with Elaborate
Comments. Karikās I-II.

E・シュタインケルナー
雲井昭善訳

この出版は、ダルマキールティ (Dharmakīrti) の Pramānavārttikam 第一章の「帰敬偈を含めて」最初の五三偈、及びダルマキールティのそれに対する注釈の翻訳である。加えて、附録として Gñoli 本に基いてテキストの相当せる部分が印刷されている。

〔訳者註—実際は Gñoli 本そのままの印刷ではなく、校訂されたものである。〕

自比量 (svārthanūmana) を取扱っている第一章の五三偈は、因 (hetu) と因の三相に関する学説の予備的な短い論議、種々の論理上の個々の問題、三因及び論理的関係の形式に関する詳細な叙述の序論から成っている。karyahetu (所作因) の叙述の次に svabhavahetu (自性因) の叙述が続いているが、それは直ちに「Gñoli 本によれば」第四〇偈からダルマキールティのアポーハ説を導き出すところの余論によって中断されて

いる。この翻訳では、この余論のまだ最初の部分にとどまっている。

一般に、ダルマキールティの論書を理解することは甚だむづかしい。その点を考慮するとき、インドの老大家と日本人学者との共同作業が、この出版のための佛教研究を意図したことに深く敬意を表したい。願わくは、この書の緒言にもみられるように、この研究が更に継続されんことを。

訳文は非常に読みやすく、広汎に亘る補足によって文章の意味を到るところで理解しやすいよう努力している。勿論、その場合、ある首尾一貫しない点については、このような増補のために括弧を用いたり、用いなかったりして確認されねばならない。個々の問題に対して、しばしば挿入を、時には長い註解を試みているのは、時には不十分なダルマキールティの言葉に対して、読者にその体系的背景をはっきりさせるのに大へん功績がある。

ダルマキールティは非常に理解しにくい著作者であるから、最初の翻訳というものは、それがたとえ解釈であろうとも、幾らか試訳という性格をまぬがれない。従って、以下に二、三の興味ある箇所を示すが、私見によれば、それらの箇所は本書の翻者とは異なって理解されうるかもしれない。けれども、それは本書の批評というのではなくて、討論に寄与するものとして理解してもらいたい。

一〇頁——この引用文 (PVSy, p. 2-5-6) ^①は陳那の論書からではなく、多分 Tarkasāstra (如実論) ^②からのものである。

〔訳者註——引用文は、*śaṅkṣāṇḍīya eva sattvaṃ iti siddhe 'pi vijñāyavāyatreke sādhyābhāve 'sattvavacanavat'* 一頁以下——*Arcata (Hetubhūṇḍīkā, p. 151, 7-16)* と *Kaṇakagomin (Svavṛtīṭikā, p. 27, 19-23)* とに従う第二偏りの二重の解釈を、私はゆきすぎであると思う。なぜならば、ちまなくば自註 (*Svavṛtīṭi*) の次の文章が不必要であろうからである。

〔訳者註——第二偏りの二解釈とは、*kāryam svabhāva-ir yāvadbhir avinābhāvi kāraṇe* にあつて、*svabhāvair yāvadbhir* が (1) *kāryam* を形容している場合と (2) *kāraṇe* を形容している場合とによる二解釈を指す。それによつて The effect is the probans of the cause with all those characteristic attributes with which it (the effect) is necessarily concomitant. Or the effect is necessarily concomitant with and thus the probans of the cause, as far as it is endowed with those attributes without which it is not understood as the probans. など二解釈が成立する。指摘なれは、この二解釈は不適当であるが、それに対してどうあるべきかという解答が与えられていない。訳者の意見によれば、*svabhāvair yāvadbhir* は *kāryam* と *kāraṇe* の両者を限定していると考えられ、その意味は、「因に対して不離の關係にある果は自性のかぎりによつてである」となる。〕

一二頁——*pramāṇam* (第三偏り) という用語は、ダルマキ

ールティによれば、「認識の手段 (organ of cognition)」なる表現に限定されてはいけない。*pramāṇam* は何よりも先ず、確実な認識そのものである。

一二頁——*pravṛtti* (第三偏り) は「認識のはたらき (the operation of cognition)」のみならず、ダルマキールティが直後にそれについて明らかにしているように (*jiṇāna-śābdavyavahara*)、対象に対する言語上の、身体上のあるまいである。

一二頁——*hetubhedavyapeksayā* (第三偏り) という表現は分けられてはいけない。自註は *anupalabdhīṇ* なる語を解釈するのではなく、*hetuḥ* なる語を解釈している。全体のくぐり、私見によれば次のように翻訳すべきであろう。「ある (量の無活動) は、その因の特殊性に依存して、非存在なるものを認識するものとなる。」

〔訳者註——第三偏りの原文は *asañjñānaphalā kācid dhetubhedavyapeksayā* である。英訳は *dhetu-ka dhetur* と「正し」 But a kind (of non-apprehension) may be the probans and lead to the knowledge of a non-existent, if it is qualified by a differentialia」と英訳しているが、指摘の如く、その訂正は誤りであり、*dhetur bhedavyapeksayā* と分けてはいない。Gnoli 本 *Maiva-niya* 本のみならず、チベット訳も一致して *dhetu* となっている。〕

五〇頁——*Tvarasena* からの引用文の翻訳を私は不適当と

思う。正しくは、「現量による背戻がありうる〔如残〕比重には雜亂がある。」となるであらう。

〔記者註——A few logicians (Īśvarasena etc.) hold that the probans here is suspected to be contingent on account of anticipation of contradiction なる訳文は、指摘されている如く、不完全である。〕

五七頁——ācāryyah (ナーチャルヤの弟子)すなわち Īśvarasena の意見 (PVSV, p. 15, 7f) 並にそれとともに又、PVSV 一二頁四行からさかのぼって全体の論究の最後の意味は、私見によれば誤解されている。Īśvarasena はありそつもな不認得を非存在における自比量の論理的な因にしようこそせず、無 (abhāva) に対する量 (pramāṇam) として不認得 (anupalabdhi) を説いている。けだし問題は、異品 (vipakṣah) の全体に亘って因の存しないことはどのように認識されるべきであるか、ということであり、陳那がまだ考慮に入れていなかった問題である。

以上、これらの僅かな実例は、次のことを十分に示している。すなわち、この難解なテキストでは随処に以上のような問題点が横たわっているし、又、それらの解釈は未解決であり、その正確な解明は更に研究されねばならない。

最後に、緒言におけるムケルジー博士の哲学史の所見に対し、もう一言つけ加えたい。それは、ダルマキールティの論理学の師 Īśvarasena について、正當に次の如く言われうるとは私は思わない。すなわち、彼 (Īśvarasena) は「陳那が Nyāyasūtra

と Nyāyabhāṣya とを無慈悲に非難したように、論書を書いて陳那を批判した云々」と。私はむしろ次の如く感じている。

すなわち、その意味において、陳那の後継者である Īśvarasena は、最後には多くの点で陳那に関連して論理学を更に発展せようと努力した^④。なお、ダルマキールティとクマリーラ (Kumārila) との関係については、更に、フラウワルナー博士 (E. Frauwallner) の論文を参照ねがう^⑤。

註

- ① Pramāṇavartikāśvayitih, ed. GNOLI, Roma, 1960.
- ② E. FRAUWALLNER: Vasubandhu's Vadavidhi, WZKSO I, 1957, pp. 143 f. 参照。
- ③ anupalabdhi (不認得) ひたな apravyitih として致す。
- ④ 拙稿 Bemerkungen zu Īśvarasenas Lehre vom Grund, WZKSO X, 1966, pp. 73-85. 参照。
- ⑤ Kumārila's Bṛhatīkā, WZKSO VI, 1962, pp. 89 f. 参照。

(The Nava Nālanda Mahavihāra Research Publication Vol. IV Patna 1964, p. 4+p. 134)